



虹の少女

kenshaku

カターン、カターン

足を踏みおろすたび、靴底と鉄板が触れあう音が響く。

見上げると黒い帯が螺旋状にどこまでも伸びていくように感じられる。

空気は冷たく澄み透明な粒子じたいが発光しているかのようで、ぼくはそのまぶしさに思わず目を細めた。

チラチラとした光のつぶが、ぼくの目のなかで遊んでいる。

午後のポワリとした空白の時間、ぼくはゆったりと流れる川の岸辺に立ち、太陽と水面の共演舞台を観ていた。ふと気付くと、時間がゆったりとした流れにかわっている。

ぼくはできるだけゆっくりとした動きで『時間(とき)のマジシャン』を探した。

ぼくの学校では生徒たちが作った新聞が毎月発行されている。そのなかに掲載されている連載短編小説の共通キャラクターが、その『時間(とき)のマジシャン』だった。

具体的に描かれるでもなく、抽象的と言うよりはニュアンス的に登場するのだが、きまって『トロリとした流れの時間』と言うキーワードと対(つい)になっていた。

生徒たちのなかで静かに流行っていた『マジシャン探し』を、ふと思い出したのだった。

実際の時間がぼくのまわりだけゆっくりとしたものになるわけじゃないだろうけれど、マジシャンが現れた瞬間、心がスッと解放され日頃のストレスが洗い流されるかのように感じた。

「こんにちは」

とつぜん背後から声をかけられ、ぼくは慌てて振り返った。

そして.....

しまった、と思った。

ぼくの目の前にいる少女に、まったく見覚えがなかったのだ。

彼女はぼくではない他の誰かを呼んだのに、近くにいたぼくが振り向いたものだから驚いて見ているだけなんだ、と思った。

「ご、ごめん.....」

あまりの恥ずかしさに声もほとんどでなかった。

自分の後頭部を右手なでつつ背をむけようとしたのだけれど、なぜか彼女の目がそれを許さなかった。

——と云うより、しょうじきな話し、見とれちゃったんだよな。

目頭のところからその輪郭線に沿って人差し指と中指の指先でなぞっていきたくなる

ような整った鼻は高くも低くもなく、頬骨はまるでマシュマロのようだし、艶やかな唇はプルンと可愛らしくありながら品格の高さを感じさせている。

でも、それ以上に瞳がとても魅力的だった。

まるで胸の一部が彼女の瞳のなかに飛び込んでいきそうにドクンと脈打つ。

そんな彼女の右手があがりスツと指差したのは、なんと虹だった。

「あれの袂(たもと)に付き合ってもらえませんか？」

目をパチクリさせているぼくを無視して彼女は歩きだした。

フワリと流れる髪の毛のあいだから優しそうな白いうなじがチラリと垣間見え、ぼくの脳裏に焼き付いた。

風になびく彼女の髪の毛の延長上にぼくはいた。まるで彼女の髪の毛の一部になってしまったかのように……

トロリとした濃密な時間が流れている。

川岸に造られた遊歩道を、彼女は流れるように歩いていく。

一度も振り向かず、一度も立ち止まらずに……

やがてぼくらは電車に乗り込んでいた。

いったいどれくらい乗っているのだろう。変わってしまったリズムのため、時間の感覚がまったく役にたたない。通り過ぎていった駅の数も1つだったかあるいは20を超しているのか、駅から駅へと歩いていたこともあったような気がする。

ただただ、ぼくはずっと彼女の瞳を見ていた。

記憶の奥底に追いやられた幾つもの思い出が、ぼくの喉に下り声帯を揺らし唇から彼女の元に届けられる。ぼくのなかで再認識され整理されるまえに彼女に吸収されていく。

自分の思い出が彼女の瞳を通してふたたびぼくに返されてきて、ようやく自分が何を語ったのか理解しているような状態だった。

ゆるり、と流れていた時間も、その流れを止めていた。

青々とした芝生が広がる遊歩道。

芝生のなかで人々は黒いシルエットとなって、止まった時間の向こう側をありありと感じさせるような姿で固まっていた。

カラフルな洋服に身を包み買い物に行こうとしている女性。花壇をジャンプで飛び越そうとする少年。小さな子供に優しく話しかける母。

そして、ぼくはいまここにいる。

頭上に伸びていく螺旋階段。

カターン、カターン

一步踏み出すたびに、輝く粒子の色が変わっていく。

赤、黄色、緑……

——虹の橋の袂(たもと)?

靴底に感じる鉄板の感触は、それが夢ではないことをありありと伝えてくる。

時間も止まっている訳ではない。日頃のストレスから解放され心がピュアになっているため、その流れがゆっくりとしたものを感じられているだけだ。

カターン、カターン

ぼくはステンドグラスでできた塔のなかにいた。

そう、

彫刻の森美術館のなかの『幸せを呼ぶシンフォニーの塔』。